

あとがき

本書は、「人の国際移動をめぐるリージョナルガバナンスの国際比較実証分析」（2017年度～2020年度科学研究基盤研究B（海外調査）：17H04543）を中心に、筆者を含む執筆メンバーが同時並行で進めていた他の複数の科学研究の成果を一冊の学術研究書としてまとめたものである。

以下、敬称を略させて頂きながら、執筆者と関係者に対するお礼を記したい。上記の科研メンバーからは、首藤もと子（筑波大学）、安里和晃（京都大学）、小川玲子（千葉大学）、鹿毛理恵（沖縄国際大学）が、多忙なかで参加してくださった。科研メンバー以外では、学会や研究会にくわえて、本書とは別の出版企画の仕事でご一緒することも多い人見泰弘（武蔵大学）と手塚沙織（南山大学）が、本書への寄稿を快く引き受けてくださった。心より謝意を申し上げたい。

また、青木元（元外務省専門調査員）、馬文甜（中央民族大学・中国）、佐々木優香（筑波大学）、櫻間瑞希（学術振興会特別研究員PD）が執筆に参加した。青木以下4名は、編者を務めた明石純一の博士後期課程ゼミに所属していた「元」学生であった経緯から、在学中の研究テーマとの関連で執筆を依頼した。

ちなみに櫻間は、その担当章で言及しているように、「国際タートル語オリンピック」での優勝経験があるタートルの末裔である。自らがディアスポラ性を備える研究者の活躍は、日本の移民研究にみられる近年の傾向のひとつであり、学术界にも新しい「移民関係」を築いている。本書中、各章の内容に対応する全10種の地図を手掛けたのも櫻間である。地図の基調色である青は、本人の研究対象地域のひとつ、ウズベキスタンのサマルカンドにて自ら撮影した写真から彩色したものであり、その想いが強く込められている。

この多彩なメンバーによる論考に登場する国や地域数は70は下らない。むろん触れる程度はそれぞれ違い、もとより網羅的でもないが、その範囲の大きさは、長い編集作業を通じて絶えず贅沢な楽しみを編者に与えた。同時にそれは、本書の特徴でもある。

本書の編集に本格的に取組み始めたのは、東京オリンピックの開催が当初予

定されていた2020年であった。2020年は、新型コロナ・パンデミックという危機が人の国際的な往來を大幅に制約し始めた年として、多くの人間に記憶されるだろう。翌2021年そして2022年前半にまで続いたこの制約も、緩和されつつある。現在の制約の強さを経験してしまえば、深刻さにおいて比べ物にならないが、2002年に発生が報告されたSARS（重症急性呼吸器症候群）や、その10年後に確認されたMERS（中東呼吸器症候群）といった感染症もまた、各国の国境に緊張をもたらした。しかしその際も、人の国際的な越境は、一時的に抑制されただけで、永続的に抑止されることはなかった。人の越境が現代社会の不可分の一部として埋め込まれているという、編者の問題意識は新型コロナ下でむしろ強化された。

それにしても新型コロナの世界的感染拡大は、人の越境を制限し、本書の土台となる研究に必要な海外調査の実施をも著しく困難にしてしまった。新型コロナは、研究生活全般に望ましくない混乱をもたらしたであろうし、普段の仕事を煩雑にしたのではないかと想像する。にもかかわらず、このようなかたちで論集をまとめることができたのは、ひとえに執筆者一人ひとりの真摯な協力のおかげである。

本書の企画を進めるうえでは、編者のもとで博士論文に取組んだ、くわえて今まさに取組んでいる最中の学生から有形無形の支援を得たことを述べておきたい。アナミカ・スルタナ（2021年3月修了）、村雲和美（学術振興会特別研究員DC）、大茂矢由佳（学術振興会特別研究員DC）、ソホラブ・アフマディヤーン、金井達也、アシュレシャ・マレス、東平福美の7名である。同様に、現在、筑波大学人文社会科学研究群の修士課程に所属する大久保桃は、本書の体裁を整える作業において力を貸してくれた。この場を借りて、あらためてお礼申し上げる。

本書の刊行にあたっては、筑波大学出版会の助成を得ている。本書の企画に対して理解を示して頂いた同出版会の関係者に、そして、すべての原稿に目を通し建設的で有益なコメントをくださった3名の査読者の方々に対して、執筆者一同を代表し、ここに感謝の意を記しておきたい。

2022年7月 明石 純一